北越雪譜 初編 中之巻

和書門
類 三六五二六號
函 一二二
架 一
冊 七

内閣文庫
和書
類 三六五二六號
冊 七
函 五
架 五

内閣文庫
番號 和 36526
冊數 7 (2)
函號 175 78

国立公文書館
National Archives of Japan

北越雪譜初編巻之中

目録

雪頼人ホ災七・次第下ホつゞく　寺の雪頼
玉山翁ゞ雪の圖　越後縮
縮の種類　縮の紵並紵績
績輪　織婦
織婦の發狂　御機屋
御機屋の靈威　縮を爾も並縮の市
ろふら　雪中花水祝ひ
菱山の奇事　秋山の古風
狐火　狐を捕る
雁の代見立　天の網

雁の總立　渋海川ざい渉り

通計二十四條

北越雪譜初編巻之中

越後塩澤　鈴木牧之　編撰
江戸　京山人百樹　刪定

○雪頽人ハ災ヲ

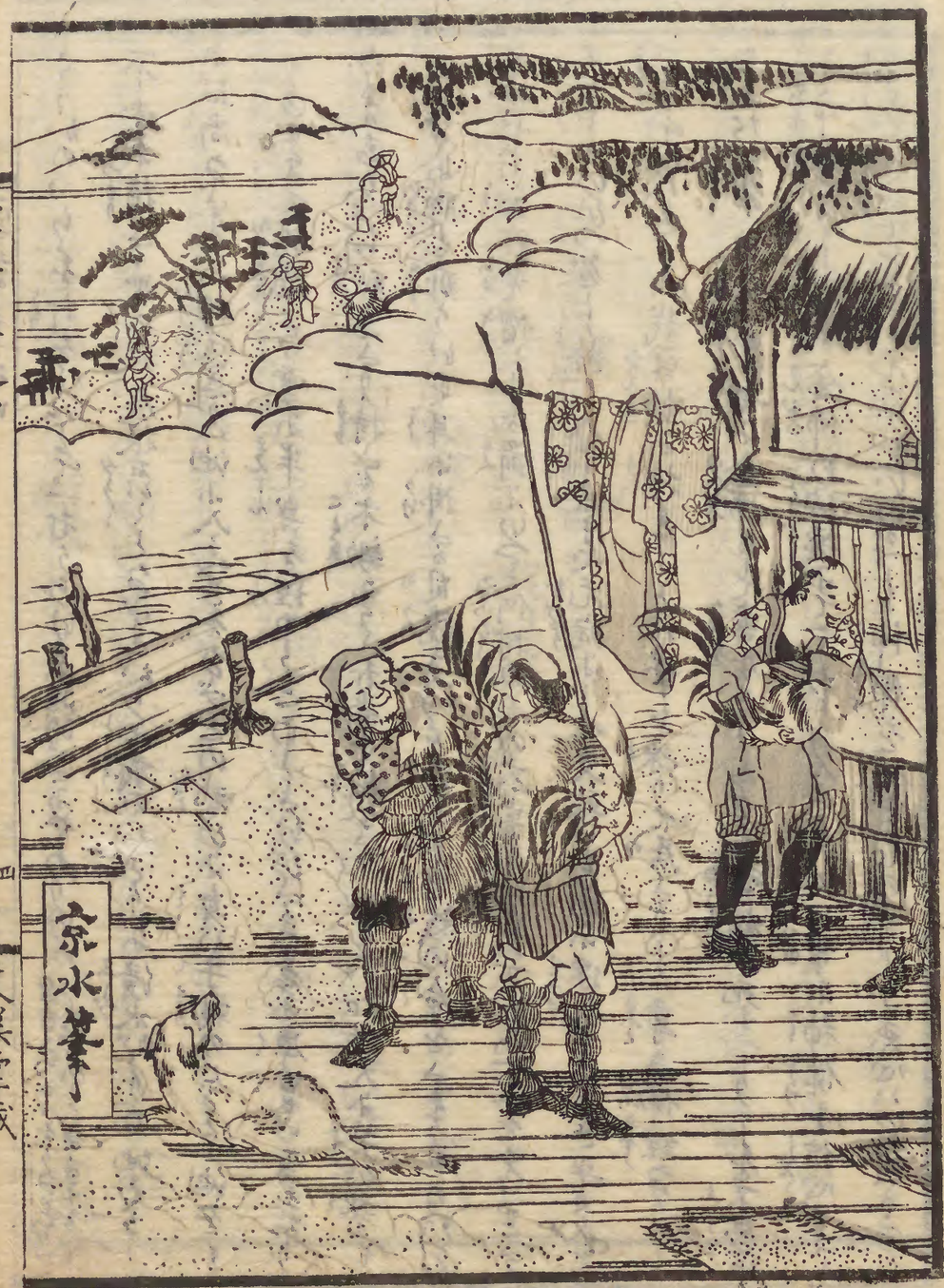
吾住魚沼郡の内ハ雪頽の為ハ非命の死をするる事其村の人のそらをてハ記ヲ記ヲ人の不祥ヲ人名を詳ハせバ○ヲ何村とハ所ハ家内の上下十人あまりの農人あり主人ハ五十歳ばかり妻ハ四十ハ世息ハ二十あまり娘ハ十八と十五といづれも孝子の聞ありけり一年二月のすゑ主人ハ朝より用ある所へ出行しが其日ハ已ハ申の頃ハまでも帰りきたらざるの間をとるべき用ハもあるべきけれバ家内不審ハ思ひ怪家僕をつかはして其家ハ行父ハ事をたづねしハきたらざるとのこたへ家僕ハ帰りて尋求しるど更ハ音沓をきかぬ日もすゑ暮ぬるとまもなく空しく家ハ帰

りきゝくのゝ一母ハ語りけるべこハ心得ぬるゝとて心あてりの処てかゝと人を走
らせて尋させけるハその在家さゝハきるべ其夜四更の頃ハいまゝども主人ハ皈
らべ此事近隣ハ聞えて人ゝ集り種ゝハ評議して居るをりゝも一老夫来り
ていはゝあるゝの之えかゝぬとや我心あてりのゝあるゆゑ名せ中さんとゝ来
きりとのふまハてろあてりときて主人の妻大ハよろこび子どもらもともぐハ
言語をそろゝまゞ礼をのべその仔細をさゝ称けるべ老夫いふやうをゝ今朝
西山の嶺半ハきりからんとせ一時てのあゝハ行逢何方へとゝゞけるべ稲倉村
へ行とて行過のひね我ハ痼へ皈り足ゆて遥ハ行過さる頃例の雪頽の音をきてこゝ
ろゝべゝの山ゝんと嶺を无事ハ通りをよろこびハつけきゝのあゝハふりとを
无難ハ行過のひゝや方一ゝゞるハ逢ハきゝのハざりゝと案ゝつ痼へゝゝ今ハ皈
りゝのハゝやゝゞるハとのひゝゝ屑を皺めけるべ親子ハ心あてりときゝたのこ
ゝゝも案ハさゞひて顔見あゝせ泪さゝゞむゞりゝ老夫ハてゝをゝとゝゝハ

立ゝりぬ集居さる若人どもゝをきてきゝべゝるゞるの処ハいゝりてたゞゝこん
炬ゝらゝよるゞゝ立聽きけるべひゝりの老人ゞいゝみゝゝまゞまちゝゝ遠くたゞ
孤ハ行ゝ者もいまゞかゝゝべ今ハもその人とかゝゞゝくあゝゝの皈りなゝんも
まりゞゝゝ雪頽ハうゝゝるゝのハうゝる不覚人ハあゝゞゝをかの差奴めゞいゝゞる
ゝゝをいひゝゝ親子ゝちの心を若ゝりといふハ親子ハゝゝをハ厩ゝゝゝゝ心慰酒肴を
いゞゝて人ゝハもゝむゝゝをゝて皆打ゝゝつゝ炉辺ハ座列て酒酌ゝゝゝ時ゝゝり
て遠く走る者ども立ゝりゝハ行方ハ猟ゝゞゝりゝ○かくて夜も明けるべ
村の者どもハゝゝ聞ゝゝどの人ゝ此家ハ群り来り此上ハとて手ハゝゝ木鋤
を持家内の人ゝも後ハゝゝゞひゝゝかの老夫ゝいひつゝゝゝゝの処ハ至りけりゝて
雪頽をゝるハゝのゝゝハゝゝぬゝゝゝゝのゝゝゝるゝゝべ道を塞るゝ二十間餘り
雪の土手をゝゝりゝゝゝゝ

き者どもをつゐ近き村ゐいりて雑をかりあつめ雪頼の上ゐそうち餌をあくえつゝ
ゐもゐ処へあゐませけゐゐ一羽の雑羽さきして時ゐゐゐゐ為晨けきバ餘のゐハとりもて
ゐあつまりて声をあゐせけりこハ水中の死骸をもとむる術なゝ と雪ゐ用ひしハ應
寛のオこゝとのちゝまでも人くゐひあつり老人衆ゐむゐひあゐゐハゐゐゐ此下ゐ在る
べゝいぎ掘ゐゐゐんとて大勢一度ゐ立かゝりて雪頼を碎きゐゐどゝて掘けゐゐどゐ大ゐ
穴をゐゐて六七尺ゐゐり人ゐゝゝゲ見ゐゐゐゐ

農夫頓智借雞圖


京水筆

とりかのつらを打をりんとて一打うちけるに此ひきゐやありけん里言れつらをうつこゝろ
いかなる仏ゝ古言もいふ
本堂に積る雪の庁屋根石くとのごとくもち土蔵のそとりに清水がりの池あり
に和尚ゆきをふみ押落さんと池に入るゝをゆきをゆくとの勢ひに身は手鞠のごとく池をも
えぬるをえて掘揚る雪に半身を埋めまとさけびゝるこるに庫裏の雪をかり
ぬるまのごとく馳きたり持る木鋤あく和尚を掘ひくけまば和尚大に笑ひ身をも
をつんるに聊も疵うけず耳に掛る目鏡をつゝかく不思議の命をまたりのひわ
此時七十余の老僧ゝ前に何村の人の不幸に比まば万死に一生をえたりと
天変といひつゝ齢も八十余まで無病にて文政のをりに遷化せるまで平日余に
示していまゝに我雪頼に撞をゝ紀筆を採りて居たりゝ尊き佛経なりゝ
ゆえなくゆゝ一字毎に念佛中て書居たりをるに雪頼に死をべりゝを不思議
に命助りゝ一字念佛の功徳にてやありけんさまば人は常に神佛を信心しく
悪事災難を免れんをいのるべゝ神佛を信ぜる心の中より悪心はいでぬるものゝ

悪心の元ゝ災難をのゝ第一とをゝらまき今も猶耳に残まり人智を尽して
のちをゝ大難に会ふは因果のをゝをる処なんゝ人中にまりありゝ
人家の雪頼に家を潰せ事人の死るゝどあまゝ見聞をまどもさのゝは
とてをゝ

○玉山翁ゝ雪の圖

さのゝ玉山翁ゝ梓行せゝ軍物語の画本の中に越後の雪中にたゝ
ゝ雪ゝの圖あり文に深雪とありて十二月のゝるに死る軍兵
とゝゝ挙止をゝるに雪は浅く見ゆ越後の雪中馬足はちゝ雪中
雪あさゝ国の人の画作なまば雪の実地をまゝ画者も語まるべゝ越後雪中の真景は甚しくた
ゝ作者のあまりこまゝ画者
ゝ雪中馬を用ひ軍馬をまるを馬上の戦ひ
ゝ農人もゝ
ゝ画に虚もまゝ
ゝ死もあゝ
ゝ玉山の玉に瑾あくんも惜けまば書通の交りにまゝ牧之が拙き
筆に雪の真景種く寫ゝ猶常にんゝ春の半ゝ三国

嶺ハ白紀法師嶺の名ありとハ在る温泉ハ旅りそのあたりの雪を見つるハ高き峯とりおろしたるごとく八五七間ゆどなる四角或ハ三角なる雪の長さハ二三十間もあんとハ谷ハとなりくなる上ハ幾つとなくなりくなるゆど雪国ハうきもなる見ゆさへその奇観ことゞゆハ尽しがたきなりその真景をも其座ハうつしとりなるを添て贈りしハ玉山翁ゞ返書ハ北越の雪我ゞ机上ハふりかゝるがごとく見をおどろかしたるの圖をもわれ多くあつめ文を添さを私筆ゆゑ例の繪本とゆしハゞ其書雪の霏くなるゞごとく諸国ハ降さんるゆ我ゞ筆下ハ在りとハいふとなる書翰今猶牧之ゞ書笈ハをさめあり此書なるゞしく黄なる泉ハ玉山を沈しハ惜べし〳〵

○越後縮（ちゞみの文字普通の俗用ハちゞみと訓ずるなるゆゑ）

縮ハ越後の名産ハして普く世の知る処なるゞ他国の人ハ越後一国の産物とおもひもとさハあゝゞ我住魚沼那一郡ハかぎりなる産物ゞ他所ハ出るもあるゞど僅ハしく其品魚沼ハ比しゞ〳〵なるもの〳〵縮と唱ふハ近来のゆゑなりハ此国ハても布とのゝ〳〵り布ハ紵ゆて織る物の総名なるゞバなるゞ今も我ゞあとりゆく老女なるゞ今日ハ布を市ハなるゞもけなるゞ古言なるものゝなり東鑑を案るハ建久三壬子の年勅使飯落の時鎌倉殿より餞別のゆをとりなる條ハ越布千端とあり猶古紀ものハもゝ見べきゞどきのゝ索を後のものハ室町殿の營中のゆゞどゆを記録せしゞなる伊勢家の書ハ越後布とゝふなるゆゞと見えたりさまハむしゝより縮ハ此国の名産なりしゆゑあきらけし愚案ハむしの越後布ハ布の上品なる物なりしを後ゝ次第ハ工を添て糸ハ縷をつよくかけて汗を凌ぐ為ハ綿せ織なるゆんゆゑハ綿布とゝひなるをたゞきて ちゝこのゝゝひつゝん欲かくて年歴るゆどハ猶工ハなりて地を美くせんとて今の如くちゝゝハ名のゝゝハ残りしゝゆゑん我ゞ稚なりしゝ時ハいとなりひてゝゞなるハ今ハ物の模様を織るゆど錦をなる機作ゆゑをきゝ劣ゞいふゆうるもゞなりしき模

様をもつり縮も飛白も甚上手ふるうて種々の奇工をいどもり機織婦人
ゝちの伶俐なる故ぞ

○縮の種類

魚沼郡の内ゆゝ縮をいどる事一様なゝ村ふりて出る品ふさゞまりて
自らむらより其品ふのゝ熟練して他の品ふ移らざるゆゑ其所その品を
産ぜ事左のごとし

▲白縮ハ堀の内町在の村々　組ゝを堺の内又浦佐組小出嶋組の村々

▲模様ある或ハ飛白いろある益錆とゝハ塩澤組の村々

▲益綾ハ六日町組の村々　▲紅桔梗縮のるハ小千谷組の村々

▲浅黄織のるハ十日町組の村々　又縛の弁慶縮ハ高柳郷ふかぎり右
いづれも魚沼一郡の村々ゝ此餘ちゞを出る所二三ヶ村あまど専らふせぎ
まバ〳〵舍て居るさゞ縮ハ右村里の婦女らゞ雪中ふ籠り居る間の手業ゝ

おゝゝゝハ来年賣ぎちゞをおゝゝの十月より糸をうゝゝしめて次の年二月
ゆゝびふ晒をいる白縮ハうちゝゝる所ハ雪ゆゝまバゝゝ人ハ文あるものゝど
ゆハゆゝびゝゝども手練ハよゝゝゝるものゝ村々の婦女ゝちゞをふ丹精を尽
もるゆゆゝ小冊ふハ尽〳〵ゝ其わゝまゝを下ふ記せり

○紵

縮ふ用る紵ハ奥羽會津出羽最上の産を用ふ白縮ハゆゝゝ會津を用ふ
ゆゝんづゝ影紵とゝふものの極品ゝまゝ米澤の撰紵と称もゝも上品ゝ越後の
紵商人ゝの国〳〵ふいゝて紵をゆゝとて国ふ賣る紵を此国ゆもをゝふ
古言ゝ麻を古言ふゝとゝふ〳〵ハ綜麻のるゆゝ麻も紵も字義ハゆゝゝ布ふ
織べき料の糸をいゝゝ紵を苧ふ作るハ俗也と字書ふゝゝゝり

○紵績

余一年江戸ふ旅宿せ〳〵頃或人ゝゝゝ縮ふ用る紵を績ふハその処の婦

人誘ひあつまりて一家ゐあつまりその家ゆゑ用ゐる紵を績て此人々たゞひゐその家をめぐりて績と聞しゆゑとらひきらゐる人ゞかゝる空言をバいふ〳〵けんさりゆゑ〳〵魚沼一郡も廣きゆゑ右ゆゑゐる処もあるゆゑんなひありともこゝ下品のちぐさゐ用ゐる紵のゆゑん下品の縮のゆゑハ姑舎て論ぜゞ中品以上ゐ用ゐるを績ゆゑうむ所の座をさだめあき体を正〳〵ゆゑ呼吸ゐつまて手を動せて為作をなせ定座ゐ居〳〵假ゐ居て其為作をなせバものゞゝ心鎮ぜ〳〵〳〵糸ゐ太細いできて用ゐたちぐさ常並の人の紵を績ゆゑ唾液を用ゐるゆゑとちぐさの紵績ゆゑハ茶碗ゆゝの物ゐ水をさゝゐひ〳〵ことをもちゐ事毎ゐ盥ハ座を清めてことをなせり

○縷綸

糸ゐ作るゆゑ座を定め体を囲位るゆゑ績ゐおゆゑ縷綸その道具その手術その次第の順その名ゐ呼物許多種くあり繁細の事を詳ゐせんハゞ〳〵

けきバ言ゞそも〳〵うゝたゞむゝより初りをゐるまでの手作をゞく雪中ゐ在上品ゐ用ゐる処の毛よりも細き糸を緝兆舒疾してあゝゐゆゑ雪中ゐ篭り居る天然の温気を得ざるバ為〳〵難〳〵温気を失ハバ糸折るゆゑありをゞ〳〵ところカよゝり断るゆゑあり是故ゐ上品の糸をあゝゐ所ハ強き火気を近付ゞ時ハより織るゐ後て二月の半ゐ〳〵り暖気を得て雪中の温気薄き時ハ大ゐる鉢ゆゝの物ゐ雪を盛て機の前ゐ置その温気をかりて織るゆゑもありてゝ〳〵のゆゑゐ付て熟思ゐ緝を織ゆゑハ蚕の絲ゆゑ陰熱を好布を織ゆゑハ麻の糸ゆゑ陰冷を好むさて緝ハ寒ゐ用ひ〳〵温ゆゑ〳〵ゆゑ布ハ暑ゐ用て冷ゐゆゑ〳〵ゆゑ是ハ天然ゐ陰陽の気運ゐ属ゐる所ゆゑんゆゑ件の如く雪中ゐ糸ゝゆゑ雪中ゐ織り雪水ゐ洒ぎ雪上ゐ晒ゝ雪ありて縮ありさゝバ越後縮ハ雪と人と気力相半して名産の名あり魚沼郡の雪ハ縮の親ゝゆゑ〳〵蓋〳〵薄雪の地ゐ布の名産あるハ糸の作りゐよるゆゑ越後縮ゐ比ゞ〳〵知る爲〳〵

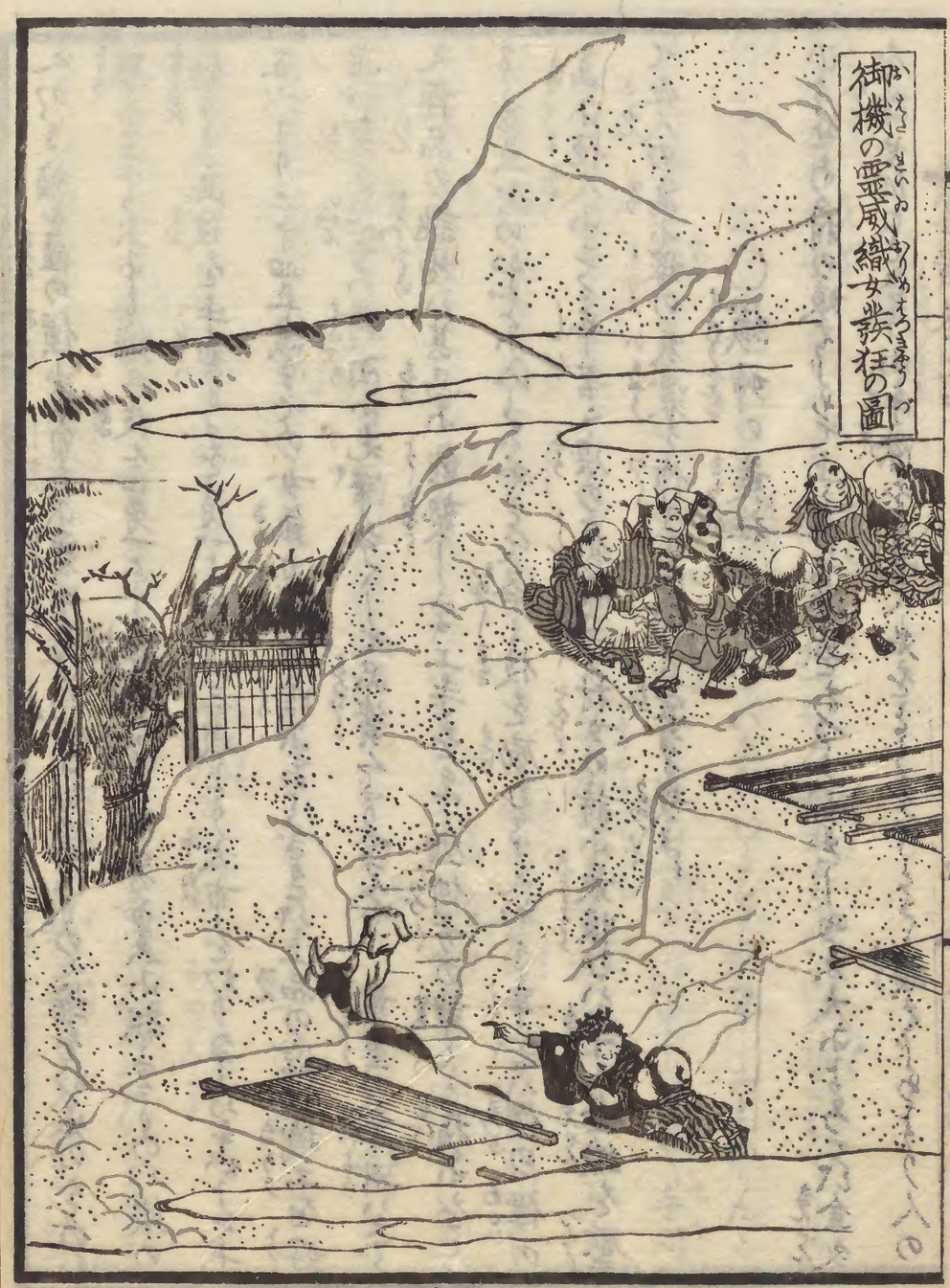
○織婦

凡織物を専業とする所ゆへ織人を抱へ織るを利とし縮ふ織くそ別ふ无き一国の名産なれども織婦を抱へ織る家多くあるいんとなれば縮を一端ふ織るまでふ人の手を労するすくなく尽くしがたく多く手間ふ賃銭を當て算量するゆへわづか雪中ふ籠居婦女等が手を空くせざるのこの活業と縮の糸四十綾を一升とのへ上くのちぢこへ経糸二十升より二十三升ゆも至る但一歳ふ二度ちぢ通もて糸一升の糸ハ八十綾之布幅四方ふ緯糸もて多くふ織ハさるべ僅ふ一尺あまりを織るふふ随くく併ざるべ地をなさべよと糸ハ猶多くふ織ハさるべ僅ふ一尺あまりを織るふも九百二十度手を動もてを以て一端を二丈七尺とし二万四千四百八十四度手をたくくなさるべ端をなさざるべ是ハ其凡をいふのを績もてるより織おろし晒しあげて端ふなるまでの苦心労繁おりへもるべちぢのこゆへなりぎくくぞ織物ハまべく然なるんが目前ふ我が視ところなるへふ

之かくる縮を僅の價ゆて自在ふ着用もるハ俗ふいふ安いもの之縮をなる処のそのハ娶をえくふゆも縮の伎を第一とし容儀ハ次ともこのもふ親るものハ娘の幼より此伎を手習もるを第一とし十三歳より太布をおりなるもそ、よそ十五六より二十四五歳までの女氣力盛なる頃ふおくべ上品の縮ハ機工を好せべ老ふ臨でハ綺面ふ光澤なくして品質くてりて又ハ之極品の誂物ハ甚品ふ能熟くくるる上手をえくべ何方の誰くと指ふをくるるもそのかぶふハくべとて各くく伎を励むもの之かくる辛苦ハ僅の價の為ふ他人ふもる辛苦之唐の秦韜玉が村女の詩ふ最恨むハ年年金線を壓て他人の為ふ嫁の衣裳を作るといひくハ宜なる哉くく

○織婦の裝狂

ひとせある村の娘たゞめて上くのちぢをあつくらきーゆ糸大ふよろこび金文を論ぜべとくくふ手際をこせて名をとくくぞやとくく績そゞめより人の


御機の霊威織女狭狂の圖

娘の男
京水筆

手をかゝぐ丹精の日数を歴て又その織おろしをさゝやより母ゞ持きてゝ
しときて娘ハたゞ見て物をもらけてるをもうちゝきそひ紀又きゝばいろ〳〵てゝ
夕ゞどる煤いろの暈あるをこそ母さゑいろゝせんゝやとく縮を頼ふあて〳〵
哭倒まけるゞこゝより發狂とゝりきゑぐの浪言をのゝ走りて家内を狂ひそる
をゝ〳〵両親娘ゞ丹精しる心の内をおもひて哭ふる紀けり見る人ゝもあゝまどり
てゝゝ袖をぬ〳〵けるこゝ友人ゝふゞ〳〵ものゞてりせり

○御機屋

貴重尊用の縮をゝるゆハ家の辺りふつゝり〳〵雪をもその心〳〵掘きて住居
の内ゆそゝ〳〵け烟の入ゝぬ明りもよき一間をよく〳〵清らあて〳〵き筵を
ちゝ紀ゝ〳〵四方ゆ注連をひきこゝ〳〵その中央ふ機を建る是を御機屋と唱へ
て神の在ゞごとく畏尊ひ織人の外他人をゝまゞ織女ハ別火を食〳〵御機
ふかゝる時ハ衣服をあ〳〵ゆ塩垢離をとり盥漱ぎとゞ〳〵身を清む日毎

ふかゝくのごとく紅潮をいむゆハ勿論ゝ他の娘らゝと今ゆハ誰とゝあゝ御機屋
を拝ふまゝあるゞゆりふいゝと至極上手の女ふわゝきゞ此ちゝてゝやを建るゆ
ゝけまゞハ他の婦女らゞこゝを羨るゆ比諭ハ階下ふありて昇殿の位をゝ〳〵む
ゞごとく

○御機屋の霊威

神ハ敬ゝふよりて威をまゝゝハ宜ゝる哉ゝりそゝの物も守ゝ〳〵て敬ひ信
おゝまゞ霊あるゆ空〳〵〳〵ゞ人のゝきゝてゝる草鞋ゞふ衆人の信ゞ〳〵ゆより
てのちゝハ草鞋天王ゝて祭り〳〵事五雑組ふゝゝてゝりゝて神ゝゝゝ
を敬ハ霊威ある冥ゝの天道ハ人の知を以てゝりゝゝゞゞてゝふ或村の娘
例の御ゝゝゝふありて心を澄〳〵ゝゝをゝりて居てゝりふ傍の窓をゝと
くゝと音ゝふゝのあり心ふゝゝゝとゝゞゞあゝゞハ立よりてひゝきゝゝふゝゝて
心を通ゝ男ゝをゝりふ〳〵人間の関ゝあゝゝ〳〵心ゝゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝ

家の後ふいて窓のもとふ立て男を將て木小屋ふ入れぬ娘の母紙り來りしかとも娘ふ娘のをゝゐを見くいびりもきりふその名をよびけるの木小屋ふきうけて遽驚死男ハ逃奔り娘ハ心顛倒して身を織さるもすでふ死いもとゝふ入りそのまゝ御機ふ入りて織んとおけるふ倏急仰向ふ倒れ落血を吐て絶入けり母此状態を見て大ふおどろ紅をつとりて助け起まづ御をゝゐよりいでゝさゝぐふいてふりしが気息あるのゝ如死しゝるゝ

父ハ同村のゐふゝゝ家ふ在しをよびくゝ医をまねきて藥ふゝ与

しゝゝゝのあるもゝ西親ハさゝゝあるうとりさせよりしゝものゝ娘の側ふ在てゐるゝゝ手を束て死を俟のゝゝあるゐひとりの男來りさも恥らふさるゆゝく人の後ふ座しゝ欲言としていびゝ頭を低て涙をおとしけり人ゝてゝをゝゝゝゝゝゝゝゝ同村の某ゝ次男ゝけり此男ゆゝて膝をまゝめ娘の母ふ對ひ声をひそめくいふゆう今ハゐゆをうつゝゝゝ中さん我ハ娘御と二世の約束をゝさる

ものゝさゝきのみゝ人ゐきをゝゝくもゝゝゝゝを誘ひいでゝしふちん泉のゝりゐひ

ゝゝゐふかゝをゝゐゝゝゝゝゝゝゝゝ

とりの娘ハうるはしをとこ女ハうまれつきのよろしい人
けるとばもとめハ御機おりしこハ覚えしがのちくばとの小母ハあるりの
うるしきかの男ゆもあんせんこせんわいろう立さりけんそそびりぬかくて娘
四五日ハうるはしがやがて常並の身ゆありけり歳も十七あまハかるて聟をと思
ひをりくるをりくるとばかのちのび男ゲ實心ゆ愛て早速媒の橋をとてー
姻礼もめでたくとのひく程ゆく男子をまうけ其家今横業の神の
御罰ゲ夫婦の縁とありしも奇偶とのつべしこハ我ゲ幼うし時の事くき
筆のつべゆ記して御機屋の霊威あるゆをもつどゆもるるうと
畏てー慎もべー

○編を晒も

晒屋とてとをのこ業とて又あり家ゆくさるもあるとど稀ゆり
さしやハその家の辺又程よ地所を見立をとゆ假小屋を造り物をも置

まこと休息の処とも晒人ハ男女ともうちまりし身を清めるゆ織女の如くた
さるもハ正月より二月中の為業之此頃ハいまゴ田も圃も平一面の雪の上ゆ
さるその上をさしし場ともるもあり日の内ゆさしし場を踏へしる処まもべ
手頃の扱ゆ柄をつけるる物ゆて雪の上を平うゆるるしくかくぜぎもべ夜
の間ゆ凍つきてふるるしる処その多くゆ岩のごとくあるゆ多く晒場ゆハ一点の塵も
わしせざるべ白砂の塩漬のごとしさて白ちづくハありしるるまをさしる餘の
ちづくハ糸ゆ作りしるを拐ゆうけてさるもその拐ハ細き丸竹を三四尺ゆこのち
ふるるてその強ゆ糸をうけ拐ゆるるし半ゆうけまてさしる白ちづくハ平地の
雪の上ゆもさしし又高さ三尺ゆまりし長さハ布わどゆるるし横幅ハ勝手ゆまち
せ土手のやうゆ雪ゆるるつくりその上ゆちづくをのゆるるべさしるもあり
うしせざるべ狗ゆど踏越てちづくをけゆまもゆ多くとゆ拐をるるべさしるもある
くしるるその場所の便利ゆまるべふゆ多一定ゆるるべさて晒しやうハ編ゆまあ糸

雪中晒縮圖 此所もべて皆雪の上へ
医師雪舟ふのりて病家へ

ゐもあり一夜灰汁ゐ浸し紋りあげて夏のごとく
さらさら　貴重尊用の縮をさらさらハこれ
場をもうけようづゐ心を用ひくさらさらの御機をかるゐ同じ我国わくハ
地中の水気雪のうゐゐ発動ざるゆゑ雪中ゐハ両まて春ハこれ
件のごとく日ゐさらさら晴のつづく事あり灰汁ゐひたてハさらさらの毎日
ゐをかりて幾日を歴て白くさらさらをかるゆゑ
らんとする白ちぢみをさらさらをりくく朝日のあらくと昇て玉簾平上ゐ列さる
水晶白布ゐ紅映しくる景色ものゐたくかくる光景ハ雪ゐまるとうる暖国
の風雅人ゐ及ぼすべきものゐて凡ちぢみを晒ゐハ種くの所為あるとゐハ其
大畧をしるしの

○縮の市

市場ちぢみの市あるハまくゐらくる堀の内十日町小千谷塩澤の四ヶ所之

初市を里言ゐもくまあるとの雪どけの簾の明をつくる四月のすゑゐ有
堀の内よりすゑむ次ゐ小千谷次ゐ十日町次ゐ塩澤いづれも三日づ間を置
てあり一年ゐよりて右四ヶ所の外ゐハ市場ゐ十日町ゐハ三都呉服問屋の定
宿ありて縮をこゐ買市日ゐハ遠近の村くより男女をいらぶ所持のちぢみゐ名
所を記しる紙簽をつけくく市場ゐ持よりその品を買人ゐ及ぼして賣買の直
段定まバ鑑符をこしらへその日市まて金ゐ換ふ為ゆゑ半年あまり縮のゐ
ゐ辛苦をこゐハ此初市の為ゆゑバ縮賣ハさらさらゐ那るもの人の濤をこと
せ足こを踏まこ肩こを磨る方の品くもちゐ店をもうけ物を賣る遠く来りる
ものハ宿をもとむるもあるとバ家毎ゐ人つどひ香具師の看物藥賣の弁舌人
の足をとゞめて錐を立べき所もあるぬやうこ此初市の日ハ繁花の地の粟饒
ゐもをさく劣ど右ゐ四度の市をもうけてのちも在くより毎日問屋来りそちぢみをうる
又ちぢみ仲買のもの在くれいとうてゐるこゐ六月十五日迄を夏ちぢみとゐひ
十七日より翌年の初市ちぢみの精疎の位を一番二番とゐ價の高下ハよりて定

あきどもその年〳〵ゐとりてもそこ〳〵のさゝひあり市の日ゐその相場年の気運ゐつまく〳〵自然さだまる相場よりはまゝ三ぜんのちゝ二ぜんゐのゞ二ぜんも一ぜんゐ位も前ゆるゐるでゝちゞこゐ手間賃を論ぜざるものゐ多誰ゐ知らざるちゞこゐ初市ゐ何程ゐ賣ゐりよわど手がわゞりさりゐどらゐゝを誉こゝ或ハその伎ゐよりて要ゐゆゝゐんとゐゝゐゝ娘もあまゞ利を次ゐして名を年〳〵ふおのゆゐゐ市ゐちゞこを持やゐゐ兵士の戦場ゐむゐゐゞとゝさてちゞこの相場ハ大やゐゐ穀相場ゐおゐゞゐゐて事ハ前後も年凶もまゞ穀ハ上り縮ハ下る年豊ゐまゞ縮ハ上り穀ハ下る豊凶の万物ゐ係る事此一を以て知べゝさまゞ万民豊年をいのゝぎゐや

○わふら

我塩澤の方言ゐわふらとゐゐ雪頽ゐ似て非ゐるものゝ十二月の前後ゝあるものゝ高山の雪深く積りて凍る上へ猶雪ふゝ降り重り時の気運ゐよりて山ゐ谷ゐ沫〳〵きゞ山の頂の大木ゐつりゐる雪風ゐどの為ゐ一塊り枝よりおちゝゞ山の峰ゐ随ひて轉び下りまろびゐゞ雪を丸て次第ゐ大をゐゝ幾方斤の重きをゐゝるもの幾丈の大石を轉ゝ走どゝゝゐとまゞが為ゐあるゝゝゐ雪ゐゝせゐゐゝ雪の供波をゐて大木を根こぎゐ大石をもゐゝゝゐ人家をもおゝゝ傾まゞゐゝあり此時ハゐゐゝゞ暴風雪を吹きちゝゝ凍雪空ゐ布て白昼も立地ゐ暗夜とゐる事雪頽ゐおゐゐゐて前ゐゐゐるでゝゝゐゝゐゐゝゐゐゝゐ

とるゞあまくあまどうるさけまべあるさべ

○雪中花水祝ひ

魚沼郡の内宇賀地の郷堀の内の鎮守宇賀地の神社八本社八幡宮之上古より立せあふとゞ縁起文多けまべとゞ省く霊験あるるハ普く世ふ聞処のり神主宮氏の家ふ貞和文明の頃の記録今ふ存せり当主八文雅を好吟詠ふも富り雅名を正樹とのハ余も同好を以て交を修む幣一と唱る社家も諸方ふあまくとある大社之此神の氏子堀の内ゆゑ要をむ之八婚をとりふるふも神勅とて婚ふ水を賜ることを花水祝ひとのふ毎年正月十五日の神事之新婚ありつる家毎ふ神使をあるるあ門ハあき時八早朝よりして黄昏ふいたる時もあり友人嘿斉翁曰堀の内の人花水祝ひとのふるハ淡路宮瑞井の井中ふ多遷花の落る祥あり人ふの日本紀ふ見えるふ温縟して花水の号とるふ起立ゆやとのふまきさるべ新婚の婚ふ神水を汲る当社の神秘とゞきて

当日新婚ありつる家ふ神使とるゞき人八百姓の内旧家門地の輩神使を務ゞ家定めありその中ゆく服忌ハさゝ寡ある者家内ふ病人あるるの縁類ふ不祥あるゝもの皆除くいさるも家内ふ故障ある平安無事ある者を撰び神事之前の朝神主沐浴斎戒し斎服をつけく本社ふ参りえゝびる人々の名を書て御闔ふあげ神慮ふ任て神使とゞ神使ふ当りる人潔斎して役を勤む是を大夫とのふ嘿斉翁曰ことゝもとるふ浄行神人ことのり大夫八俚言の称さて当日正月十五日神使本社を出るその行装八先狭箱二本道具臺笠立傘弓二張雑刀神使侍烏帽子素襖次ふ太刀持長柄持傘さゝかる供侍二人草履取跡鎗一本あるるのを用ふ人氏子の人々大勢麻上下ゆて随ふかる行装ゆく新婚の家ふいるゝ也その以前雪中の道を作り雪ゆて山ゝちのゆるる所八雪を石壇のゆるふつり或ゝ雪ゆく桟ゆきゆく処を作りて見物のたりとゞたまるゆるあまくの人夫を雇ゝとるゆゝさてその家ゆて八家内をとくく清めつゝて其日正殿の間とるのる

一間ハ塩垢離ふきよめてを神使の席とし絲莚を布ゐて上座ハ毛氈をしき上段の間ハ表り刀掛をおく次の間ハ親族ハさゝとしき人こゝより祝儀のおくり物をうゝべおく嶋臺ゆゞふ賀詠をそへ又のゞさめぐゝ門ハ幕をうちよせ其の処をおゞりあげてゝふ褻脱の壇をもうけ玄関式臺ハ准ふ家内のものいつまる衣服をあらゝゑ神使をまつ神使ゐてるときけバ親あるものハ親子麻上下ゆゝ地上ハ出て神使をむかふ神使のさゝりとりさゝゐふせきてゝて跪居り大声ゆて正一位三社宮使者と大呼神使を見て亭主地上ハ平伏し神使を引てゝの正殿ハ座さしむ行列ハ家の左右ハわゝて隊をうもさて神使ゝ燗盃茶吸物膳部をいゝさし数献をまゝむあゝゝあゝ婚ハ盃をゆふ三方肴をえさむ献酬七献をかぎる盃ごとふ祝義の小謡をゝふ事終りて神使ゑる他ハ新婚ゐりゝ家あまハ又到る式前のごとし此神使ハゝの花水を賜ふ事を神より氏子ゝ告ゆふの使ゝ神使社頭ゝ皈る時里正の家ハ立ゝり酒肴の神使社頭ゝ皈りゝをゝく踊りの行列を繰いゝ一番ハ傘子錦のゝゝひをゝけ旋し端ハ鈴をつけ又裁工の物さゝゝるをさげる傘子の上ハ諫鼓を飾ることを持ものの二人紫ちりめんゆて頬をつゝゝもゝひさまおゆゝ紅絞ゆゞを片襷ハかゝる嘿奇白ものゝ祭礼ハ用ゐる傘子とゝる物ハ古ハ羽葆蓋の字を訓り所謂織ハしゝ神輿鳳輦を覆ひ奉るべき錦蓋ゝものゝ猶説ありしゝ長けまゝ省くさて二ぢんハ假面をあゝ鈿女ハ扮こる者一人幣のさゝハ紙ハ女冠をゆゝをつけゝかゝゝ次ハこゝも假面ハて猿田彦ハ扮こるもの一人麻ハゝゝ作りゝる縄帽ゆゝの物を冠り手拑のさきを赤くゝて男根ハ表示こるをゝゝ三ぢんハ法服を美ゝしゝかざりたる山伏螺をゝゝ四ぢんハ小児の警固ゆゝ身をゝゝて隨ふ次ハ大人の警固麻上下杖を持て非常をゝゝむ五ぢんハ踊の者大勢花ゆゝ俗衣ハ正月人勢ハ染巣ゆゝ色ある細帯をゝ一群行里言ハことをゝうゝゝゝゝゝ降臨象ゝゝ皇孫日向の高千穂の峯ハ天降りゆゝハ縁るの心ゝゝと嘿

花水祝浴水畧圖

堀の内驛花水祝ひ
噪劇の図原本の
草画を此ホ載て
別ホ至細の図を
示さるものハ
梓刻の労を
省ま在り
梅まきて春なと
この方や学ぶも
少を祝ひ
堀の内を
山東庵 京山
鈴木牧之画

翁いひ傳説あり。十どそなぶくさて壻の方にハ此をとり場をまもるゐ人のまくて
まうけいきあてゝ死道をこしらへあてゝ大きき手桶二ツに水をこゝらと松葉と
昆布とを水引ゆくまきびつけ山ろの上に大きき銚子盃をそなへ水取て
壻に水をあぶる者二人副取とゝのへ二人ものゝ長きいきをひつゝ一げに
いでゝうちとハゆゝ細帯ゆてをどりのきゝるをまつをどり家にもちゐけバ行列
ひゝとゝ踊人かのむろのめぐりにむらがりそうゝひつゝをどるその唱哥に
「めでたゝの若松さかハ枝も栄ゆ葉も茂る「さんやめでたの花水さんやせるゐ
おびぜん我夫男ぐせるゐ」をりゝ〳〵ちやうがをうえそうゝひをどる事慢る踊の
けいこかの水とりもその程を見て壻に三献を祝ぜうの手桶の水を二人して
左右とり壻の頭へ滝のごとくあびせかゝることを見て衆人抃躍てめでゝ
と賀ふむてふそのまゝ日ごろいふ入せ入りをどりハ猶家にもかゝ入りてをどりう
ちふる七八遍ゆてどろ〳〵と立さり再びもゝのごとく列をなして他の

壻の家にいる事をそゝもをどりハ猶役の家さそハゝとあるものゝらゐゐる入
りてをどりありくと田舎人ものを視るゆまゝ此日ハ遠近の老若男女
おもをそんとて戦のごとくあつまりもゝとりもて熟巣もるゆ筆下に
尽〳〵がて〳〵○按るに壻に水を汲ぐ事ハ男の陽火に女の陰の水をあぐ
て子をあゝしむるの呪事ゆて妻の火を置ることの祝事と此事室町殿の
頃武家の俗習よりまてりて農商もこゝにハ倣ひくゆ行ハゝて事物に不足
なり貝原先生の歳時記ゆハ松永弾正が婿事より起るとゝ江戸ゆてハ宝永の頃までも世上一同正月十五日の
事とゝ祝義のゆるゐりて大に流行しゆ婿に恨ある者事を水祝ひ
よせゝさゝぐゝの狼籍をなす人もまゝありて人の死亡にもまゝ及ぶ虎
うゝゆ多正徳の頃国禁ありて事絶さりしかゝ物語ゝの
りのに見えさり国初以来の事を記する宮本元禄中をさりにへる人の老ての作なり件の花水祝ひハ神秘と有バ
別にゆゑよゝもあるゝあるゝと雪のつのゝゆゝその大巻を記して好古家

の談柄に具そなへ

○菱山の奇事

越後の頸城郡松の山八一庄の総名にて許多の村落を併合する大庄なれども平地にて一村の内とは雖も平地にて一村の内とは雖も平地にて松代とは所のと平地に農家軒を連ね外百番の謠ふ所なり松山鏡とは雖も此地とそのうとひふある鏡ヶ池の古跡もそなはり今は池はもわ〜ねやうに埋まりてその跡ばかりのこれり按ずるに松山かがみのうしろに鏡破の繪巻とふものを原として作るなるべし此巻を見るに右の松の山の事見えたりさて松の山の庄内に菱山とは雖も山の形三角なるゆゑの名なるべし山にちなむ処に須川村川に沿ひて曽蒲村といふあり此ひと山毎年二月に入り夜中にかがりて雪頼あり其ひき一二里に聞ゆ傳ていふ白髪白衣の老翁幣をもちてなるに乗り下るとふまと此なるべき須川村の方へ二十町余の処真直に突下る年は豊作と曽蒲村の方へ

斜に下るべし年は凶作と其験少も違ふ事なし年の豊凶雪頼に係る事此山に限るも一奇事とのべし

因に云ふ余が旧友寺泊に住丸山氏の医家祖父は博学の聞えありし人なりき余二十年前丸山氏の家に遊弟をとどめし時祖父が宝暦の頃の著述とて越後名寄とのの書をつくせしに三百巻自筆の写本と名寄とはもと越後の風土記なり一国の神社仏閣名所旧跡山川地理人物国産薬品の類まで一部を分図をいでて通暁しつくさる精撰と此書に右菱山の説も粗ぼ見えたるどさのこふとそ引き菱山のつゆをのふつきて此書の事をおりひいでもしるかる精撰大成の書も空しく秘笈にありて世に出ざるが惜けれども

○秋山の古風

信濃と越後の国境に秋山とのふ処あり大秋山村とのふを根元として七十五ヶ村をなべて秋山とよべり秋山の中央に中津川とのふありて奥沼郡妻有の庄を一の川の東

西ハ十五ヶ村あり東の方ハ在る村ハ▲●市ハ越後ハぞくも▲市ハ信濃ハぞくも●清水川原村人家三軒あり毛ぬれとも村の名ハちぶ●三倉村人家三軒●中の平村二軒●大赤澤村九軒●天潤村二軒▲小赤澤村二十八軒▲上の原十三軒▲和山五軒西ハある村●下結東村●逆巻村四軒●上結東村二十九軒●前倉村九軒▲大秋山村人家八軒あり此地根元の村ハ〻相傳の武器ハどを持しものもあり〻ゲ天明卯年の凶年ハ代〻てくてハえ猶〻〻〻〻て一村のこ〻ぜ餓死して今ハ草原の地となり〻〻ときけり▲屋敷村十九軒▲湯本温泉此地東ハ苗場山天ハ聳えて連岳ときめぐき西ハ赤倉の高嶺雲を凌て衆山ときハ双ぶ清水川原ハ越後の入り口湯本ハ信濃ハ越るの嶮路あるの〻一夫是を守ハ万卒も越え難き山間幽邃の地〻里俗の傳ハ此地ハ大むり〻平家の人の隠る所といふ牧之謂ら〻鎮守府将軍平の惟茂四代の后乱奥山太郎の孫城の鬼九郎資国ゲ嫡男城の太郎資長の代まで越後高田の辺鳥坂山ハ城を構ハ一国ハ威を震ひ〻ゲ謀叛の聞えありて鎌倉の討手佐〻木三郎兵衛入道西念と志ば〻〻戦ハ〻終ハ落城せり此時貴族の落人ゲ此秋山ハ隠ま〻〻ゲ〻ん〻里俗の傳ハ平平氏とのゝるもよりあるハ似ゲ此秋山

ハ古の風俗ものづ〻〻残ま〻りと聞〻ハ多一度ハ尋ぬべきとおもひ居り〻ハ此地をよ〻〻ゲ〻る案内者を得ざ〻〻ハ偶然ありへ〻ゲ案内ゲ教ハまりせ采味噌醤油鹽節茶燭燭まで〻ま。用意〻て従者ハ〻〻せ〻〻立ハでハ文政十一年九月八日の事ゲ〻り記その日ハ秋山ハ近き見玉村の不動院ハ一宿次の日桃源を尋ゲる心地〻て秋山ハ〻ぶ〻入りぬ〻入り口ハ清水川原〻ハ〻ハ〻〻んとも〻る道の傍ハ丸木の柱を建注連を引ま〻〻中央ハ高札あり〻〻る事ぞと立ゲ〻ま〻ば小童の〻きて〻る〻ゲ〻〻〻〻

逃るゝ人さまたげ此地ゆへ疱瘡せる者甚だ稀と十年ゐ一人あるゝのみと語り
さて清水川原の村ゐいろ〳〵ゐ家二軒あり家居の作りさま他所ゐ異なり高低あ
ゐゆへ〳〵ひく立ゆ〳〵ゐとまりもの猿飛橋を見玉へとて案内ハ前へ立て行此
秋山の道ハもぐく所の人のかゝふべきこゝあゐのこひきする道ゆへ牛馬ハさらゐ徒
ひぐる所なまべとゝきゝゐ道狭く小径なれど深く〳〵てやう〳〵道をのとむる所高く
ありかゝてゝの中津川の岸ゐいてまり岸の對ひ逆巻村ゐいる所ゐ橋あり猿
飛橋とのゐ橋のさまをゝゝるゐよりゝゝや猿ゆへも翼あるぐまべ飛べくもあらべ西岸ハ
絶壁ゆへ屏風をたてるが如くなれども岸より一丈あまり下ゐ西岸より三
ゝひいる岩の鼻ありてこゝをさゝりとして橋を架〳〵てる橋ある所へ下らん為ゐ
樓をまうけてあり橋ハ直なる丸木を二本ならべ細木を藤蔓ゆてあとゝつけてるゝり
渡りハ二十間あまり橋の廣さハ三尺ゆへさまべ欄干ハのとより作らぬ橋を渡りて
對ひの岸ゐ藤綱を岸の大木ゐゝ〳〵下げくあり之ゐ縋りて岸ゐのぐる之ゝり

とゝもゝで又る之ゝ危けまべ芭蕉ゞ蝶も居直る笠の上とゝひ〳〵木曾の桟ゆもをき
〳〵劣ぬ此橋を渡るゆやとゝゐ案内ゞゝる〳〵今日ハ此岸ゐつきゝく東の村〳〵を
又玉ひく小赤倉村ゐいろ玉べ程よき道ゐるべ〳〵小赤倉ゐハ知る人もあるべ痛
をのとむべ〳〵とゝゐ橋をゝゝゝゝぐとゝきて心もちつき岩ゐゝゝけて墨斗とりいべ
橋を寫〳〵ゐどゝて四辺をゝゝてゝゝべ行雁峯を越て雲ゐ字をゐゝべ支猿捐をつ
とひく水ゐ画を寫ゝ奇樹崖ゐ横ゝゝりて竜の眠るゞ如く怪岩途を塞ぎく帛
の卧ゝゐ仗ゝり山林ハ遠く深く錦を布き碗水ハ深く激して藍を流せり金
壁双び緑山連りゝるゝゐ画ゆもいとべぐる光景ゝ目ゐゝるゝ〳〵べゝゝ〳〵ゐ
農夫二人きてゝりおの〳〵畏を脊負ゝくゝの橋をゝゝゝんとゝゝ岸ゐゝゝくゝゝを
ゝゝべゝの横を石壇のごゝくふゝゝべり橋をゆく事平地のごゝくゝの半ゐいゝべ
橋揺くゝとして危きゝゐいんゝゝゝゝゝゐゝゝゝ身の毛いとべゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの藤綱ゐゝゝゝ〳〵岸ゐのゞゝ〳〵猿のごゝ〳〵ゝゝゝ〳〵人のゝゝゝをゝて目

を新ふせりさてこてを太く例の細道をとどり高ふのぞり低ふ下りとやどの途
をへて四つ三倉村ゆいて至りて中八人家三軒あり今朝見玉村より用意して
弁當をひらくにやとあらいふ入りしふ老女ようちゆつとといひつ木の盤の上ふ長
き草をちきて木櫛のやうなるものゆく撰て解分るさまいろるるりの中何ふもるぞ
と問へば山ふあるいらといふ草ことをを糸ふしてあを衣を作ることりくりあを衣といふ
名のめづらしけまば強くうづけまば老女ハこうひくてこそ家内がかくよりあを
衣とハ婆くどの暑るあまことのふそををこまを帯布のやうなを袖をー羽織の
やうふ考る物ゝ茶をたひけまば老女果ーてすづ疱瘡の事を問ふ家内どのふ我ふ
塩澤より秋山をこふきてうしーものゝ考やさハゆハ去年此ことをうハをーとの
老女いくくうらど肉のものハ今年ハ井戸蛙のやうふさろりどんど里ハ一度も出ぬん
どとのひつくくる出るる茶をこまば煤を黄どーるやうなまば別ふ白湯をのとあ
て喰ーをいりつくく此住居をこるふ礎もをえぞ掘立る柱ふ貫をば藤蔓ゆて

縛りつけ菅をあこうけて壁とー小き窓あり戸口ハ大木の皮の一枚なるをひらめて横
木をまこーー藤蔓ゆてくーーとあ閾もなくて扉ゆ寸茅菅のいらゆも矮屋ゆで
うりをあふ作りくる草屋なまど里地より雪ハふくらんとりくバカハ強く作りくる
なべーー家内をこまば稿莚のちきまこるをちきなべ
納戸も戸棚もなーーこで菅縄ゆくつくりくる棚あるのこと囲炉裏ハ五尺あまり深
さハ灰まで二尺もあるべーー薪多き所ゆく大火を焼くゆ多く家ふちくるものハ
木鉢の大なるゞ三ツ四ツあり所ゆて作るゆ多く薬鑵土瓶雷盆などいづまの家ゆも
なーー秋山の人家まべくこまふかなーーー今日秋山ふ入りこふいくりて家を五ツ八
ゞ粟稗を刈こむころなまば家ふ居る男をこまぞさて中ゆくひーーうち紡の實をひ
ろひくく山よりかくりくーーこのふ娘をこるふ髪ハ油気もなくまろめつくゆくるを待
ゆて結ひなるべくる手拭ひゆく頸巻をなーー木綿給の垢づきくるゞ常なるこより一尺
もこゞくふ中二寸ばかりのものん帯をくーーこるふもこまべり女のまちまるとおびの帯
のせばハ古画ゆもあまこえ

えてる古風なきものくさぐさ　秋山の女ども
きもの中紀ものの古風な

かくの如く差女ゐ土地の風俗なるべしと心
うへはざるべからざるべき物をとせしやがて立さりけり　○かくて中の平村九軒
天酒村二軒大赤澤村九軒を歴る道なる嶮き山行して此日申の下刻やうく小赤澤に
いたりぬるゆへ人家九八軒ありて秋山の中二ヶ所の大村なり上結東ハ九九軒有此村ゐ市左門とて
村中第一の大家あり幸ひ案内者の智人なるべ猶をもとめあなたに入りて見るゐ四間
ゐ六間ゐどの住居に主人夫婦ハ老人ゆへ長男ハ北七八次ゐ娘三人あり奥の方ゐ四
畳だゝりの一間ありて多くゆへ稿筵をしきてあり　古画ゆもあるに見えたる古風なり
勝手の方ゆハ日用の器あまたとりちらしたるゐ木鉢三ツ四ツあり囲炉
裏ハ是ハの大きく深きのにて用意なる味噌をとりいだし今朝清水河原村ゐ
てもとめたる蕨茸ゐ芋などとりそへて案内ゞ料理もとて雷盆をとりへば末
の娘ゞ捌のまとりとりいだしたるを見ば常ゆハつゝまるもけ
のちゐきけば此秋山ゐもりぬちのあるハ此家と此本家のみにて此地ゆて延年豆を

作りたるめて味噌をもつて煮ても麹を入るゐをせばそ汁ゐもるゆ多もりぬちハ
ものぞるこそさて此家ゆも別ゐ竈ハ多くこゝの炉ゆてものを煮るゆやて夜もこまたと
ば姫小松を細く割たるを燈とて光り一室をてゝて蠟燭ゐもまたり案内ゞ調し
たるものをとりぬ碗ゐもり山折敷ゐを多くいだせりあるゆてゆて芋と蕪菜
を味噌汁ゐもるゐゐいぶりきものあり案内ゞさし心えていふやうハ秋山の名
物の豆腐なるゆ豆を挽るゆハせしゞ糟を淋るゆ多味ゆ喰をりて後ゆてゆ
茶の間の旦那秋山のなるゐ人を敬して茶の間の旦那と
さしてゞくて案内ゐ間へば居風呂ゐ入り玉へとのふるゝを辱ふるをどろ又ハ居り
湯ともいふ秋山ゐもるゐ桶をもちゐハ此家と此本家とだりゝとゞ此地の人ハ冬
りをつゐをとりゐて足をあらふをせばゆもりのうへるゝ歯を
とりのりふろゐ入りしゐつゐふらるゐ道のつりをもとをとて元の炉の
横座ゐ飯りしゐ田舎のゐゐ上座とるゐゐ銅鑵もありしゐ用意の茶を從者
ゞ煮るを喫野る菓子をりの三人の娘ゐもとせるゝ三人炉ゐ腰りけく箕居

足を灰の内へ入て珍りて[illegible]を喰ふ炉の内へ柱の[illegible]を焼こうる火影に照らされて末のむらさきの八色黒く肥太りて魂[illegible]をうく裾をまくりあげて虫をひらふ八又ゞ[illegible]けまと耻らかさるもせず二人の姉八色白くして玉戎双べる美人之菓子を喰ふ[illegible]顔又あ[illegible]して打ゑまゝる面ざし愛形八こゞるゞ[illegible]

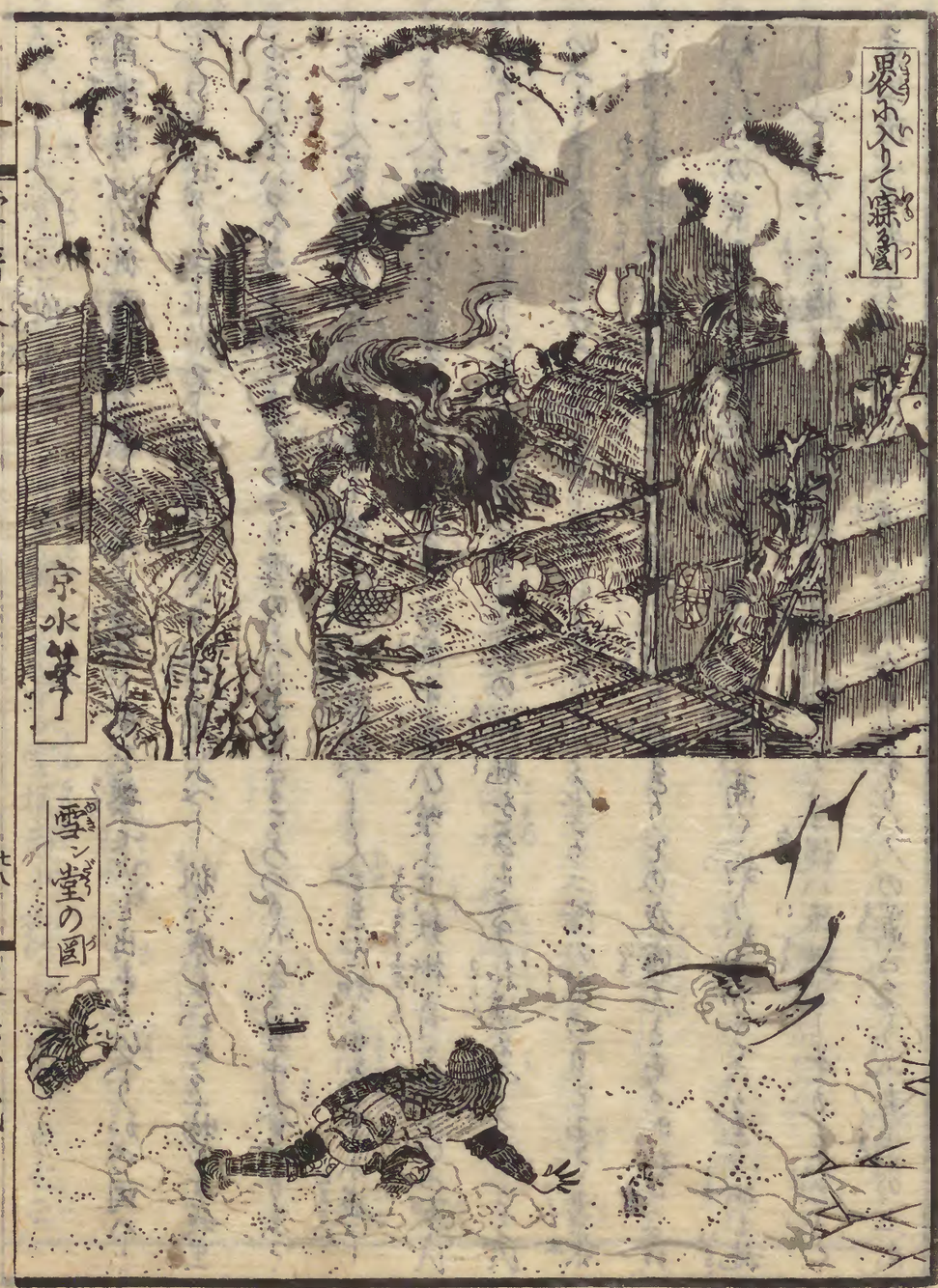
こかゝる一双の玉を秋山の田夫ゞ妻ゝせんハ可憐琴を薪として鼈を煮るゞ如く主人八里地の事をもよく知りて話も分る義理多所の風俗をゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝの語りゝ

あ[illegible]をこゝに記す○此地近年公税を免ゝ米麦を生ぜざる由多僅の貢をなす鋤役ゝ[illegible]して信濃と越後との他の村名主の支配をうけ且那寺をも定めて[illegible]ど冬八雪三丈餘もつもりて人の往来も[illegible]由多此時人死せば寺ゝ送る[illegible]ゝ[illegible]ざるゞ此村ゝ山田を氏とせる助三郎とゝゝの家ゝむかしより持傳へる黒駒太子と称する画軸ありて[illegible]を借りて死人の上を三べんくぐらせ[illegible]導として私ゝ葬る寺をさだめざるゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

べきものゝ〻ゆらをいらとのふゆや草の形状を聞ざりしも多さでめぐさ〜〇秋山の人ハもべて冬も暑るまゝゆて所走嘗て夜具といふものゝ〻冬ハ終夜炉中ハ大火をゝきその傍ハ眠る甚寒ハいきまべ他所より稿をもとめて作りもきる思ハ入りて眠る妻あるものハまもをひろく作りて夫婦一つ〻もハ寐る〇秋山ハ夜具を持ざる家ハ此翁の家とゆゝふ一軒あるのみそもうのいらゆて織るふいらのくぞを入る布子のもとゝ大ゆて宿り客のさめふもるのゝとゝぞ牧之ハ一宿ゝ時此夜具ハ所せの所ゞおろく臭ふもべきものゆへあゝぶ〇稿ハとゞ〜きゆ多鞋をもらべ男女徒跣ハて山ハもてゝくゝ〇人病あるまべ米の粥を喰せく藥とも重きハ山伏をむかくゝいのゝもも病をもの源氏ゆも〻ゝ〇鏡を持る女秋山中ハ五人ありゝぞ松山翁の故事ゝ〇此地の人もべく万古風ゝ

篤實温厚ハ〜て人と爭ふゝとゝなく色慾ハ薄く博奕をもゝぞ酒屋ゝなけまべ酒のむ人ゝ〜むゝ〜ゝよりゝ〻ゝ〜ゝもぢゆもゝもをもゝる人ゝ〜ゝとゝゝり實ハ肉食の仙境ゝ〇かゝて次の日やゞゝの稿といふをもゝりて湯本ハ宿り温泉ハ浴〜次の日

西の村〻をゝて上結東村ハ宿り猿飛橋をもゝりその日見玉村ハやゞりて家ハかゝもゝりさめぐ〜記もべきゝゆまべども文多けまべのせぞ秋山記行二巻を編〜て家ハ蔵む〇扨の本字ハ據ゆり實の食方翁ハ聞〜をゝハ記〜て凶年の心得ゝも扨の實ハ八月熟〜て落るをゝろひ煮てのち乾〜手ハ捧てあ〜き篩ハふりけて浩皮をさり簀ハ布をもきて粉ハもゝるをもきよく白〜〜水をうちて搗もきる布ハつゝ水ハ〜〜〜ゝる四五日ハ〜てゝりいぐ〜絞りて水をさりて乾〜わゞるその白き事雪のごと〜是を栗餅ゆゝふまぜ又ハ扨ぞりも食ゝも又餅ゆもるゝ別種ゆりゝも扨ハ橡の實も喰ふもの〻ゝハ扨ハ似ゝりぞ〇此秋山ハ〜る山村他国ゆもわるゝ〜を聞ゝまべ珍〜〜ゝ福ゞもゝ〜〜ゝ〻ゝる多ゝハ記せり〇秋山の産物木鉢まゞげ物る山をゝきもげ縄板るゝ秋山ハ良材多〜ゝものゝども村中をゝぐゝ中津川屈曲深き所浅き所ありて筏をゝで〜ゞゝ〜又ハ牛馬をつゝぶまべ良材を出〜ゞゝく駄をゝる事難けまべ天然の貪地ゝ



畏れ入りて寐る圖

雪ンゞ堂の圖

秋山絶壁の圖

同猿飛搗の圖

牧之画

○狐火

酉陽雜組ハ狐髑髏を載き北斗を拜し尾を擊て火を出すとしるしかの国ハこもあるを我がまゝ〳〵〳〵ハ去〳〵ぢそハ下ハいのべ〳〵狐ハ寒をおそる物なれ我里ゆそハ冬ハ入るゆ稀之春ハいり雪のふりかゝるころつゆ〳〵る雪中食ふうえて夜中人家ハちろづき物を竊ふ喰ふゆ甚悪むべ〳〵人ことを知るゆ多るをハ盗ドとゝ〳〵人智を以てるまへハけどもまゝ〳〵の間ハ奪ひ喰ふ其妖術奇〳〵怪〳〵ふべ〳〵べ時ゝ〳〵てるまゝ来ゝとゝぞろハ鼠のごとく〳〵狐の妖魅をなすゆ和漢めづ〳〵〳〵べいへもさ〳〵るゆまゝどのハ之我雪中ハわりをぷ〳〵んとめ二階の窓のもとゆ〳〵書業ハ倚る或時故人鵬齊先生より菓子一折を贈まりしの夜寢んとする時狐のつゆ〳〵おもひらの菓子折を紵縄ゆそ強と縛〳〵天井へ高く釣りおきかく〳〵ハるまゝ術も施〳〵ぞ〳〵んと自傲り〳〵ふゝそ朝ハ見るまゝ〳〵〳〵る縄ハ依然とし〳〵てもとのごとく菓子折ハ消失るゆ〳〵〳〵猶憎むべきハ今〳〵しきりハ人の置るゆ〳〵ハ書業の上ハ

ありひゝきつゝまべかわひゝ紙もそのまゝ〳〵ハ〳〵るゝ〳〵ひ尽せりしの妖をゆ〳〵〳〵る不思議之或時ハ猫の声をゆして猫を呼いゞそて滝〳〵且喰ふ老狐ハ婦女を妖〳〵て滝るもあり滝せ〳〵〳〵女ハゆ〳〵髪をこゞ〳〵其処ハ所〳〵て熟睡せるゞごと〳〵〳〵その由をこゞぬまゝども一人も仔細をゝ〳〵り〳〵女子〳〵皆前後をゝ〳〵ぢ〳〵ひゝまゝ〳〵ざるゆハあるまゝ〳〵けまゝども事を恥ていゝぞるゆんさそ狐善く氷を聽と言事酉陽雜組ハ又ゆ云ハ本朝ゆそも今橋諏訪の湖水ハ狐渉〳〵を視て人渉りまゝ〳〵む和漢相同じ狐の火を為た説ハさゆ〳〵あまゝどゝゆ信ぞ〳〵我が目前ハ視〳〵ハある夜深更の頃例の二階の窓の隙ハ火のうつゆを怪〳〵とその隙間より覗きゝまゝべ狐雪の搖揚の上ハ在りそ口より火をいゞそよくゝまゝべ呼息の燃ゆるとその態口よりまゝ〳〵上ハゆゆるゆまへハいゝる寒火のごと〳〵ありゝろけまゝべゝゝ〳〵くのゞきゆゝ〳〵〳〵ゞ火をいゞまゝ時といゞきゞゞ時ありゝるまゝゞ肚中の気ハ応ぞるゆんゝるまゝゞ気息常ハ火をゆきゞゝハ勿論之石亭ゞ雲根志ハ狐の玉のひゝるゆを云

しゞ狐火ハ玉のひるゆもあらぬ狐の玉とゝ物の光ると常ハ云る狐火とゝ
別ゆゑ〳〵

○狐を捕る

友人曰我が親しき者隣村へ夜話ハ往る飯るゝ途の傍ハ茶鐺あり〳〵しゞ頃
しも夏のゆゑ〳〵ゆゑ農業の人の置忘れとゝるゆゑんさるゆゑも腹悪きものハ拾
ひ陪さん持飯りて主を尋ぬやと鐺を手ハさげて二町ばかりあゆゑ〳〵ハ云きるハ
重くゆゑり鐺の内ハ声ありて我をいづく〳〵連れ行ぞとゝハ云ハ驚を消し鐺をとゝて
逃さり〳〵ハ狐前ハ云〳〵り草の中へ入り〳〵とゝ〳〵り二ハ月ばが一時の戯れゆる
ゞ〳〵る妖魅の術ハありゆゑ〳〵人ハ欺れて捕へらるゝハ如何余答てゝハ鐵炮を以
てゝるハ論ゆ〳〵番餌を以てゝるハ人〳〵の欺くを知れども慾を捨て慎むゆゑ
ハゞ〳〵れとゝハ知りゆゑ〳〵ゝれを喰ひ〳〵友て人をあざむんとして捕へらるゝゆゑん
ゝれ邪智ふかきゆゑ豈狐のゝゆゑんや人も又是ハ似り邪智あるものハ悪支

とハ云りゆゑ〳〵かく為バ人ハ云るゝ〳〵と已ゞ邪智を以ゝ終ハ身を亡ぼハ云る淫
慾も賊慾も慾ハいづれも身を亡ぼの番餌と至善人ハ路ハ千金を視室ハ美人と
對れとも心安ハ動ざるハ止ることを知りて定るゆゑかゝる人ハ胸ハ明ゆる
鏡ありて善悪を照し視てよきあしきを知りて其獨を慎む之を明徳の鏡と云
此鏡ハ天道さゆより誰ゆも〳〵与へらるれども磨ざれバ〳〵さびとゝれ若り〳〵
時ある經学者の教ハ聞〳〵と狐の話ハつけ大学の蹄ハ付て風諫せ〳〵ハ問ひ
人弱年ゆゑ云るも身ゆちの〳〵ゞれとゝり〳〵者ゆれバ有りきゝてハ无用の長舌ゆ
れどゝりハいづれ〳〵ハ云るせゝ云るせりさて我ゞ里ハて狐を捕る術さゆゞ〳〵ある
ゆゝハ手を懐ハして捕る術ありその術いろんとゆれバ春陽の頃ハつゆり〳〵雪も
昼の内ハ軟ゆるゆゑ夜ゆゝ狐の徘徊ちる所へ麥ゆゞ舂杵を雪中へさし入て二ツ
も三ツもきれゞけの穴を作りおけバ夜ハ入りて此穴も凍りて岩の穴のゆうハゆり
さてゝれゞ好く油滓ゆゞをちゝ〳〵おきうの穴ゆも入れゝくさて夜ゆけ人静りゝる

ところ狐ちかきうちゝゝおきてるを喰ひ尽ゝ猶さゝぎまぶるゝぞゝの穴ゐあるを
くゝんとゝ身をあぶら倒ゐありて穴ゐ入りいまきてるものをくゝひつて出んとする
ゐ尾のもとゝいづる程ゐ作りまうけゐる穴ゐまぶ再びいづるゐ叶ふぞ雪ハ深夜ゐ
やこびてきもゝゝこゝりゐまぶちゝゝゐハ穴をかぶるゐもゐゝびいぞんゝとして
終ゐハ性を労らも捕へんとまゝりゝものこまをゐくゝ水をくゝきてりてあるゐ入るゝ
あゐりゝゐる雪の穴ゐまぶかゐくハ水も漏ぞ狐ハ尾を振ハて水ゐくゝむ入ハ辺りゐ
ありてゐまぶ将ゐ死せんとまゐる時ゐゐゝぞ屁をひるを避る狐尾を揺さぶるをゐて溺死さ
るを知り尾を採り大根を抜がごとくして狐を得る穴ニツも三ツも作りおくゐ為をり
よゐ時ハ二疋も三疋も狐を引抜ゐあり之ハ凍りて岩のやうゐ雪の穴ゐまぶあり
土の穴ハゐまぶ得ものゐまぶハ自在をゐて逃さるゝゝさまぶ雪国ゐぶぎるゐゐまぶ
雪のつゝゐゐ為せり

○鴈の代見立

我国雪盛ゐ時ハ鳥ゐの食をぶきものの一点もゐぶきゐゐ冬ハ山野の鳥を捕へ
春ゐいてり雪降りやゝゝ頃諸鳥をゐる二月ゐいてりても野山一面の雪の中ゐ
清水ゐぶまぶハ水気温ゐゐゐ為雪のもとゝゝ消る処もありて水鳥の下る処へ
雁ゐまをゐまぶまづ二三羽ゐゐゐをりて己まづ求食さて糞をのこして喰ある処の
目ゐハ俚言ゐこまを雁の代見立とゐふ雁のかくまゐハ友鳥を集ひきてりて
かまゐゐも求食せんとて胴友ゐ信あるゐ人も恥べきゐゐを心ゐき徒ゐの糞
をゐぶゐありて代見立の糞ゐまぶゐゐ種くの術を尽して雁のくるをまちて
捕ふ雁もゐびゝゝとゐまてこまをゐるゐゐ人ゐ捕せゝとて糞ゐ土をゐけてゐゐ
ゐゝゝ代見立ゐゝゝきゐで食ゐりゝゝ処ゐふんゐ土をゐけぞゐゐびまゝびその
智ある人ゐゐゐ人まこまをゐを知りてゐるさび糞ゐ土をゐけてゐるをゐまぶ
其辺りの矢頃よき処人の入るべき程ゐ椀をゐせてゐるゐゐものを雪ゐて作り後
ゐ入り口をつけ内ハ洞ゐゐ雁のをるべき方ゐ穴をつくりてそのきてるをまち雁ハ不時

ゆへきこえぬべき時雁をつくまばらの穴より鉄炮の銃口をいでそうろうかくるを里言
ありまのかいふべし

ふゆきんぞうとゝふ雪ン堂ゝ雪ン堂の術あり雁の居る処を窺ふに夕暮夜半暁ゝ
人此時をまちて撞くの工を尽して捕ふ我国雪の為ふさぐの難美はわ〳〵すー
前ふりゝるどとゝかるとゝも雪の重宝なるもあり第一は大小雪舟の便利編の製
作○雪ン堂○田舎芝居の舞臺拵敷花道なる雪にて作る○辻賣の居る処賣
物の臺架もなる雪にて作る是を里言ふさろやとゝふ○獣狩追鳥○積雪家を
埋め却て寒威を禦ぐ○夏も山間の雪を以て魚鳥の肉を擁包おけば敗餒ぎ
○雪水江河の源を養ふ○ど此外詳ふいぐ猶あるべし是をおもへば天地の万物捨
てきりのはあるべうべうで捨てきはは人悪のこと

○天の網

おゝよそ人悪をおして天罰ふ漏ざるるもの奥の網ふりまさるがごとくなるもあることを
とゝ〳〵天の網とゝふり新浮より三里上りて赤塚村とゝふあり山のところ〳〵ふ

四をおゝるるありとゝふ扨をゝ〳〵細糸の網をたりて鳥をとることを里言ふ赤塚
の天の網とゝふ此村ふ沼あるゆゑ水鳥沼を慕ひくきたり山の四を飛きたりる
らど天の網ふゝ〳〵大低は鵜とゝふ鴨ふ似る鳥ゝ美味なるゆゑ赤塚の冬至鳥
とゝ遠く称美を鵜鮨とゝふべきを省けるおんあぢるるとは古哥ふもあまた
よあり

○雁の総立

おゝよそ陸島は夜中盲とゝふり水鳥は夜中眼明ゝとゝふ雁は夜中物をゝるるもの
など明ゝ他国はゝ〳〵も我国の雁はおゝくは昼は眠り夜は飛行く眠る時は人ふ遠き
処ふゝく集り眠る此時は首をあげて四方をゝるくゆる雁二羽あり人とゝを番鳥
とゝふ求食ふもゝゝ飛ふ列をおもは雁行とて兵書ふもゝり人のゝる処ゝ
ど居ふもゝ位列をおして漫おゝ〳〵も求食時は衆あさり遊ぶ時はゝゝあそぶ雁中
ふ一雁ありて所為衆ゝゝふ随ふ大将ゝ士卒とのごゝ一人のきるゝ又はゆゝきを
ゝんまばらのだん鳥羽ゝきをおもゝ餘のとりとゝをきいゝふ求食とも極ぶゝとも此羽

うきをきてあるまゝに幾羽も亂て飛わかりさて列をなして去る里言ふこれを雁の
総立とのふ雁の備ある事軍陣の如し餘の島ふるまうゝ他国の雁もかゝるなん
田舍人ゆへ珍しうかゝ都會の人の話柄ふらくり

○浦海川さへ渉り

ちかぢか川源ハ信越の境よりいで越後の内三十四里を流れて千曲川ふ伴ひ此海ふ
入る此川越後の○頸城○奥沼○三嶋○吉志の四郡を流るゝ由ふ四府見の文字
ふうんうとかりひしふ僻ゆゑ古書ふ浦海又新浮海ともゝえうり此川屈り曲り
廣狹言ひ尽しがたゝ冬ハ一面ふ氷り閉てその上ふ雪つもりうる所平地のごとき
まで急流岩ふ激して水勢絶急ところハ雪もつもるゆへふ浪をうる処もあり
渡口などハ斧ゆて氷を碎きてうさせども終ふハ氷厚くなりてかゝるべくて船ハ陸
ふ在りて人〻氷の上を渉ることを里言ふさくとのふ我国の俚言ふもべく
物の凍るを○さへ○ちる○いてなどのふ此川の氷り正月のもゝ二月のもゝ

めふいまだ陽気を得て自然と裂て流る大なるハ七八間種〻の形をなす一大小ひ
とつゝゝ川の廣き所と狹き処とふあるとなり且ふ裂ものゆへ夕べふなるとをかるか
なるゝ一日あるひハ一昼夜をへぎりとして三十四里の氷ところゝてゞけるゞまて北海ふい
づるそのひゞき千雷のごとく山も震ふだるゝ此日川ふちかゝ村〻ハ慎て居て外ふ
いづるなかれ他所の者ハ浦海川の氷見とて花見のやうふ酒肴をこゝろゝ岸
ふ彩筵毛氈などしきてこれをうる大小幾万の氷片氷鼎の盤石のごとき盃
のやうなる浪ふ漂ひなゝるハ目ざましき荘観なり氷を観て楽とする事暖国ゆハ
さらふあるべからず此川ふさらべつとのふ奇談あり次の巻ふらんず

北越雪譜初編巻之中終

国立公文書館
National Archives of Japan